

「市民的」抵抗グループのナチズム観
— 運動課題としての《覚醒》から《人間形成》へ —

對馬達雄

Zur oppositionellen Einstellung der zivilen Gruppen zum
Nationalsozialismus

— Vom “Erwachen” zur “Menschenbildung” —

Tatsuo TSUSHIMA

Die deutsche Widerstandsforschung liegt bisher außerhalb des pädagogischen Bereichs. Bis heute kommt diese Forschung für die Bildungsgeschichte fast nie in Frage, den Widerstandskämpfer Adolf Reichwein ausgenommen. Sie wird hauptsächlich als Thema für die andere Geschichtswissenschaft betrachtet. Aber das Phänomen des Widerstandes gegen den Nationalsozialismus ist auch für die deutsche Bildungsgeschichte der Nachkriegszeit sehr bedeutungsvoll, weil es wesentliche Momente für den Aufbau der Nachkriegsbildung — sozusagen als “Brücke” über die Nachkriegsbildung — enthält. Das Wichtigste ist hierbei die Wiederherstellung der christlichen Erziehung in der Nachkriegszeit.

Diese Abhandlung zielt darauf, die von ethisch-religiösen Grundüberzeugungen getragenen Bildungsgedanken der zivilen oppositionellen Gruppen gegen Hitler deutlich zu machen.

Der Inhalt ist wie folgt:

- I Religiöse Zuneigung und Anti-Nationalsozialismus
- II Grundtendenzen der oppositionellen Einstellung zum Nationalsozialismus
 - i) “Massenmensch”
 - ii) “Geistiges Erwachen”
 - iii) Religiöse Ethik
- III Wiederherstellung des “Bildes des Menschen”

はじめに

筆者は先の教育史学会シンポジウムにおいて、「ナチズム・抵抗運動・戦後教育」のパラダイムをもって、教育史の新たな研究視角と領域拡大の必要性を提起した。より具体的にいえば、それは反ナチズムの政治的抵抗運動の思想と行動を中心に据えて、その教育史研究としての意味、とりわけ1950年代までのドイツ戦後教育史の「橋渡し」の意味を問い、さらにそこから新たな研究領域を開拓する必要があるという提案であった⁽¹⁾。

このように筆者が主張するのは、教育制度の復興をめぐる《新秩序か復古か (Neuordnung oder Restauration)》(ランゲ=クヴァソフスキ, J.) の論議⁽²⁾ が、戦後教育の思想状況を直截に対ワイマル関係に遡及し説明してきたこと、研究史としてもナチス崩壊を分岐点に現代史を区分する枠組みに基本的にとどまってきたこと、このことへの疑問があるからである。そこにはナチス支配期と戦後期との関連性如何の問いが欠落している。なるほどこの問いは1980年代の社会史研究の立上がり以来、もはや目新しいものではない⁽³⁾。だが、教育研究においてもやはりこの問いを放棄しては、戦後教育史の実相は

理解しえないと考える。というのも、これまで等閑視されてきた抵抗運動に着目すると、ナチス支配期に伏流しまたナチズム体験の中で浮上したキリスト教復権の思想が、戦後教育生成の過程に勢よく合流した事実が明らかになるからである。

本稿の表題にいう「市民的抵抗グループのナチズム観」とは、こうした課題意識から引き出された検討のテーマである。もちろん、体制転覆にまで突きすすむ反ナチス運動とは、本来極限的な政治的行動と見るべきであろう。だが反ナチスの活動へとうながし、またその活動を支える抵抗の思想が政治的次元にとどまらず、「教育的思惟」すなわち《人間形成》の思想に転化しようという側面までも、否定されてはならない。この視点こそが重要なのである。

反ナチス運動はよく知られているように、告白教会に代表されるドイツ教会闘争をはじめ、軍部によるクーデター計画、社会主義労働運動サイドの抵抗、反ヒトラーユーゲントの青少年グループの敵対行動、《白バラ》運動をふくむ市民的グループの抵抗など、多岐にわたっている。しかもドイツ現代史研究の一分野として抵抗運動研究はすでに膨大な成果を蓄積してきており、その腑分けをすることじたいすでに容易ではない。だが少なくとも教育研究として見たばあい、これまでこれらの領域から抽出され対象化されたのは、反ナチス教育者アドルフ・ライヒヴァイン (1898-1944) に焦点づけた研究をのぞくと、わずかに日常史研究を承けた《エーデルヴァイス海賊団》や《スウィング》などの青少年の反ナチズム行動に限定されてきたといつてよい⁽⁴⁾。

こうした事態は、ナチズム教育研究の立ち遅れもさることながら、従来抵抗運動のような歴史学研究的対象とした分野に教育研究として接近する姿勢が往々にして欠如してきたこと、いわゆる「教育分野」として捉えやすいものだけが対象化されてきたことに原因がある。だが必要なのは、対象領域について《人間形成》にかかわる論理が抽出できるか否かの視点と発想であって、依拠する研究の軸足がしっかり定まっていることである。それは着想の新奇をてらうことでも、借り物の論理を誇ることもない。

では、なぜ市民的抵抗グループなのか。端的に言えば、その政治的行動がナチス体制の克服を展望しつつ、ナチス教育の対抗理念へと昇華する内実を備えたものとなっているからである。キリスト教理念への回帰にその最大の特徴がある。もとより、ここにいう特定組織を離れた「市民的」立場の抵抗者の諸グループ、たとえば《ゲルデラー・グループ》にしる、あるいは《クライザウ・グループ》や《ローテ・カペレ》にしる、その思想的立場は保守主義的志向から社会主義的志向まで多様であって、

単純一律に括ることはできない。だが反ナチズムに焦点づけられた彼らの思惟の特質ないしその基本的傾向については、描出することが可能であろう。

この点で考慮すべきは、ライヒヴァイン自身がその主要メンバーとなった《クライザウ・グループ》の存在である。同グループは抵抗運動において《思想集団》としての性格と左右両翼の抵抗グループ間の結節的役割を占め、「抵抗運動の《魂》」(リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカー)とまで評されているからである⁽⁵⁾。したがって、市民的抵抗グループの思惟傾向を検討しようとする、クライザウ・メンバーの所説が大きな意味をもつことになる。本稿ではそのことをとくに顧慮しながら、所期のテーマに迫ることにしたい。

なお筆者は、クライザウ・グループにかんする考察を別の論稿において集中的におこなっている⁽⁶⁾。それとの関連からすれば、市民的抵抗グループの思惟の基本的傾向を描出しようとする本稿は、導入部ないし序論の意味を併せ持つものである。以下、抵抗者の反ナチズム行動の契機を探ることから本題に入るとしよう。

I 宗教的心性と反ナチズム行動

全体主義体制にあつて、特定組織の一員ではなく一個人として人間がその体制に〈否〉を唱え反対するという行為には、自己の内面の規範を根底から問いなおす作用がともなう。この行為は所属する国家の存在以上のものとして、自らのうちに構築した倫理的諸原理を貫徹しようとする意志にもとづき、たとい同土集団の形をとるにしても、あくまでその人自身の主体性に帰着するものであろう。主体性とはこのばあい、いかに行動するかを選択にある。とりわけ戦時下という条件においては、それはいわば国家にたいする極限的な自己の発現となるはずである。したがって体制に同調しないばかりか、体制に抗議しつつには体制転覆にまで突きすすむ市民的抵抗者たちの反ナチスの政治行動に、自らの生き方を根源的に問う規範意識として、宗教的信仰に表現された倫理(=宗教倫理)が内在したとしても、そのことじたいはごく自然なことである。

じっさい彼らが、教会的抵抗をふみ越えたかのボンヘッファー、D. (1906-1945 刑死)の願ってやまない《市民的勇気》^{フイバーグ・クラーグ}⁽⁷⁾を、生命をも賭す非合法の地下活動によって貫こうとしたとき、宗教的信仰に最終的な根拠を見いだしたことは、遺された書簡や文書にも読みとることができる。たとえば1944年10月20日、刑死を目前にライヒヴァインが妻に宛てた獄中書簡には、神と向きあった自己省察と敬神の姿勢が鮮明に記されている⁽⁸⁾。それはク

ライザウ・グループ主宰者の法律家モルトケ伯, H.J. (1907-1945刑死) や同ヨルク伯, P. (1904-1944刑死) 最後の書簡にしても同様である⁽⁹⁾。さらに《白バラ》メンバーのヴィリー・グラフ (1918-1943刑死) が「行動のキリスト教」を掲げ、「キリスト者精神」をもって反ナチス活動を正当化したことは⁽¹⁰⁾、つとに知られている。

尤も、本稿はハナ・アーレントのように、抵抗者たちの「道徳的な憤り」の要因を否定し、「ドイツが敗北し壊滅するという確信」にその活動の動機を認める「冷たい否定的な評価」⁽¹¹⁾ に反駁して、彼らを美化しようとしているのではない。そうではなく、宗教的祝祭や教会的祭祀をつうじてドイツ人の生活世界（とくに誕生・結婚・葬儀など）に深く編み込まれ、根強く社会意識を規定したキリスト教信仰への親和性が、程度の差はあれ彼らの行動に通底していることを、最初に指摘しておきたいからである。亡命ユダヤ系ドイツ人歴史家ハンス・ロートフェルスは戦後《ミュンヘン現代史研究所》創設への参画や『季刊現代史』の発刊をつうじてナチズム研究に先鞭をつけた歴史家として名高いが、その彼が抵抗者の精神の基層に「道徳的・宗教的な衝動」を強調して以来⁽¹²⁾、抵抗運動の要因として宗教的信仰が挙げられるのも⁽¹³⁾、このためである。じじつ彼らの宗教的心性は、教会闘争にたいする姿勢にも示されている。

ここで、ナチス独裁制とキリスト教との相克として表現される教会闘争について一言しよう。周知のように、ドイツ国民中ほぼ三分の二を占める福音派の教会内闘争（「ドイツ的キリスト者=帝国教会」対「告白教会」）として生じたこの闘争は、信仰闘争の域にとどまらず、その後の展開の過程で人権の抑圧や非人道的・犯罪的な政策（とくにユダヤ人・心身障害者の抹殺など）への抗議行動をも包摂した政治的レベルにまで拡大深化している。注意したいのは、ナチス宗教政策が徹底した《世俗主義》（Säkularismus）によって公的生活からの教会・聖職者の影響力、とりわけ青少年教育への影響を排除することに力点があったために（ナチスのスローガン《青少年を握るものは未来を握る！》を想起せよ）、教会闘争は教会系青少年組織を解体させた党・国家的な青少年校外組織＝ヒトラーユースと教会との青少年の争奪をめぐる抗争、より具体的には、学校の宗教的基礎の排除・宗教教育の存廃にまつわる「学校闘争」（ゲオルク・マイ）としての性格を終始つよく帯びていたことである⁽¹⁴⁾。この論点はとくに別稿で検討していることでもあり⁽¹⁵⁾、重複を避けるが、市民的な抵抗者たちが教会闘争に関わるばあい、こうした「学校闘争」への態度表明をもうながすものとなったこと、それがクライザウ・グループの戦後構想の論議において一大争点となったことを、ここでは指摘し

ておきたい。

ところで、ナチス体制を拒否する人々が《草の根》的にグループをつくり、直接的であれ、間接的であれ、教会闘争にも関与していくのは、とくに《水晶の夜》事件（1938年11月）を経て、ナチス・ドイツの侵略戦争の道が明らかとなった1939年以降である。これを例えば《教育的抵抗》から政治的抵抗に踏み込んだライヒヴェインの存在に引きつけると、彼がベルリン近傍の街村ティーフェンゼーの福音派系初等学校の教師からベルリン国立ドイツ民俗学博物館館長に転出した1939年5月以後、その執務室がクライザウ・グループに連なる抵抗者たちの拠点となり⁽¹⁶⁾、1940年1月にはモルトケと法律家ヨルク伯, P. (1904-1944刑死) を中心とする同志集団が形成されたことにも見てとれる。クライザウの主要メンバーは20名、その周縁にヨルクの長兄で告白教会の神学者パウル、ボンヘッファーや告白教会と密接な連携をとる経済学者ランベ, A. (1897-1948)、同オイケン, W. (1891-1950) らのグループ《フライブルク・グループ》がいた⁽¹⁷⁾。またフライブルク・グループを介して同じく告白教会との連携を深めていたグループに、国家人民党员として中央党ブリューニク内閣時の物価統制全権兼ライプツィヒ市長職にあったゲルデラー, C. (1884-1944刑死) や元ローマ駐在大使ハッセル, U. (1881-1944刑死)、国防軍將軍ベック, L. (1880-1944刑死) らの《ゲルデラー・グループ》がある。

こうした告白教会との関係に窺われるように、市民的抵抗者たちは指導者原理を拒否しイエス・キリストのみを究極的な支配者として教会の内的独立性を主張する《バルメン宣言》（1934年5月）の神学的前提には、たとえ全面的に同意しないにしても、信教の自由を謳うワイマル憲法体制を空洞化させたナチス世界観政策そのものに宗教的信仰の危機を認め、教会闘争に彼らと共有する「抵抗のモチーフ」を見いだしている⁽¹⁸⁾。もちろんそれだけではない。1931年11月、総選挙で大躍進したナチスをその生物学的人種主義（反ユダヤ主義）に焦点づけて「精神と宗教に代わって血を崇め流血を好む危険極まりない集団主義」⁽¹⁹⁾ と断言し、反ナチス行動としてあえてそれまで批判的であった社会民主党に入党したライヒヴェインや、「ヒトラーを選ぶものは戦争を選ぶもの」と確信してナチス体制下で判事となる道を断念し、弁護士としてユダヤ人の救済に努めたモルトケ⁽²⁰⁾ などのように、当初から原則的にナチズムを峻拒する人びとがいる。いわば、ワイマル政体を擁護する基本姿勢をとりつづけたクライザウ・グループのメンバーがこれに当る。

だがワイマル末期から1935年まで、ナチス入党を拒否しながらその官職にとどまったゲルデラーにしても、教会闘争がカトリック派の自由な教会活動・教育活動を保

障した《政教条約》(1933年7月)の違反にナチスとの対決姿勢を強める同教会をまき込んで頂点に達した1937年には、ナチズムとキリスト教との相克を「不可避の論理」と認めている⁽²¹⁾。とくに同年帝国教会相ケルル、H.の「国民社会主義を一つの宗教たらしめよう」という呼びかけに、彼も「追従者の靈魂をも要求する教会」(ノイマン、S.)⁽²²⁾たらんとするナチズムの、反キリスト教の本質とトータルな人間支配への脅威を確信するにいたった⁽²³⁾。それは社会的出自や政治的信条の違いを越えて、市民的抵抗者たちに通底した危機意識であり、教会闘争が人権闘争へと展開する中、この闘争に与する契機ともなっている。1942年秋には壊滅させられたが、戦争の早期終結をめざし「社会主義的な政府」にドイツの未来を託そうとする、上級行政官ハルナック、A. (1901-1942刑死)と航空省上級職員シュルツェ=ポイゼン、H. (1909-1942刑死)のもとに集まった《ローテ・カペレ》の100名以上の多様なメンバーたち、なかでもキリスト者として生きる歯科医ヒンベル、H. (1907-1943刑死)や女性法律家テルヴィール、M. (1910-1943刑死)らの、障害者抹殺(《安楽死》措置)に抗議するガーレン司教の説教(1941年8月)の印刷配布の活動も、その一例である⁽²⁴⁾。

ではこのように教会闘争に与する市民的な抵抗者たちは、その反ナチズムの思想的立場をいかに構築し、ナチス体制を克服しようとしたのか。

II 反ナチズムの思惟傾向

i) 《大衆人》

まず彼らが、ナチス支配の時代をどのように捉え認識しているかである。それは端的には大衆社会化状況にたいする批判、時代批判として現われている。つまり自己目的化した大量消費=大量生産の現代社会において、人びとのアトム化・匿名化が進行したという論脈のなかで、人間の形而上的基礎の喪失状態が批判されている。ゲルデラーが1941年初めの覚書『目標』(Das Ziel)において「技術の進歩が引き起こした物質的な力の過大評価」と「日常生活のなかで進む宗教の衰退」を指摘し、「(1918年以降ドイツにおいて一筆者)物質主義と専門主義が再度勝利した」という事態を「危機」と見るのは⁽²⁵⁾、その典型的立場である。またモルトケも同年4月24日の覚書『現状・目標・課題』では、とくに歴史的に見たドイツ人民の非政治的な個人主義を描写し、こう記している。「個々人は身分的な束縛から開放されたが、依然として自由ではなく、人類の発展のための責任感情はもはやないに等しい。(中略)国家そのものにたいする個々

人の責任ももはや存在しない」⁽²⁶⁾。さらにこうした状況認識の延長上に、ワイマル期ドイツ民主党左派の郡長でクライザウの有力メンバー、シュテルツァー、Th. (1885-1967, 1945年死刑判決)は、ナチス支配の出現について、つぎのように総括している。ナチズムは「孤立した現象ではなく、長期にわたる人類史に刻みこまれた発展の最悪の状態」を表すものであり、「抛り所を失い、生そのものへの不安から確実性と内面的世界での救いを願う《大衆人》(Massenmensch)」をとり込んだ現象にほかならない。すなわち「指導者に帰依し、全体主義の固く結ばれた宗教的なまでの同志の共同体に組み込まれることで、生の不安から解放される」という「幻想」こそが、ナチス支配を招来した、と⁽²⁷⁾。

ここには、20世紀社会の危機を試論的に描いたオルテガの所論『大衆の反逆』と類似の時代認識、大衆観が、ナチズムと対峙する中で明示されている。本書は1930年スペインで出版されると同時に、ドイツのローヴェールト書肆からも『ドイツ百科全書シリーズ—20世紀の知』のポケット版⁽²⁸⁾として刊行され、ひろく知識人の間にセンセーションをまき起こしていた⁽²⁹⁾。よく知られているように、オルテガは「技術」に収斂される19世紀文明が胚胎した「歴史意識」も「生きることへの展望」をも持たない《大衆人》(=一つの社会階級ではなく、時代を代表し時代に支配的な人間の類型)に現代が支配されているとし、ボルシェヴィズムとファシズムをその典型的運動、しかも「野蛮への後退」「人類の根本的な道徳的退廃」と断じた。そしてこの《大衆人》の対極に、すすんで要求や義務を負って「活力にみちた生」を生きる少数のエリート的集団が配置されている。

市民的な抵抗者たちの大半が、職業的に見ても伝統的なドイツ知識層・エリート層に属し(ちなみにクライザウの主要メンバー20名中デルブを除く19名は博士号取得者である)、政治的な扇動や強制から相対的に自由であったこと、しかも戦時下の状況からすれば、彼らの行動じたいが国家にたいする反逆であったために、基本的には「人民ぬきの抵抗運動」(モムゼン、H.)⁽³⁰⁾という性格を帯びたことから推して、彼らがオルテガの問題提起を我がものと受け止めていたとしても意外ではない。げんにそれは、シュテルツァーがナチス時代に生きるドイツ人民を特徴づける《大衆人》の用語が、オルテガに倣って「自ら判断する力をもたない人間」⁽³¹⁾を意味していることにも、表されている。

もちろんこのばあい、保守的自由主義者ゲルデラーから社会主義者ハルナックまで、政治的立場の多様性からすれば、彼ら抵抗者たちを大衆社会論にいう《貴族主義的》系譜の説明—それを否定しないにしても一のみをもって単純に括ることは、問題であろう。しかもクライザウ・

グループを他の抵抗グループと結節させたライヒヴァインについていえば、ワイマル期における民衆大学指導者としての先駆的活動のモチーフは、帝政期以来の「教養面で二つに分裂した国民」問題の克服（「教養の社会化」）にあったし⁽³²⁾、民主主義者としての基本姿勢は終始揺るぎないものとなっている。

だが注意しなければならないのは、そうしたライヒヴァインにあってさえも、ナチス・ドイツが崩壊に突きすすむ1944年4月9日、友人に宛てて「自分自身を改めようとする人間があまりに少なく（中略）、大衆（Masse）が自分たちのちっぽけな利己主義にのうのうとしている」⁽³³⁾と記さざるをえない現実に直面していたことである。この現実こそ、市民的抵抗者たちは等しく問題の核心を見いだしていた。

ii) 《精神の覚醒》

こうした状況認識にもとづいて、彼らの間にはナチス体制に生き体制に従うドイツ人民の《大衆人》的存在からの解放が、主要な運動課題として浮上することになった。モルトケはこれを端的に「精神の覚醒」（geistiges Erwachen）⁽³⁴⁾と表現している。市民的な抵抗者たちがナチス体制を「退廃の現象」（ゲルデラー）⁽³⁵⁾「暴虐・恐怖・あらゆる価値の崩壊」（モルトケ）⁽³⁶⁾と見做すとき、そこには1940年6月対仏戦での自国ドイツの軍事的勝利さえも「悪の勝利」（モルトケ）と断定する倫理的な価値判断があった⁽³⁷⁾。だがまさに「悪」が「勝利」という異様な事態、つまり本来否定さるべき指導者ヒトラーに熱狂し畏怖し支持者としてとり込まれ、あるいはライヒヴァインが慨嘆するような、傍観者として振る舞い事実目目を閉ざす圧倒的なドイツ人民の存在がある。ナチス支配の正当性の根拠もここにあった。そのためにナチス支配に服する人びとの心理的契機、これこそが市民的抵抗者たちの主要な問題関心となったのである。

ナチス体制に決別したゲルデラーが1937年12月、ナチズムを弾劾する『政治的遺言』をひそかにニューヨークで著したのも、こうした事態をふまえている。彼によれば、ナチズムの「反道徳的特性」は公的生活だけでなく私生活・家庭生活の領域にまで張りめぐらされた「監視」や「密告」に象徴的に表されている。しかもドイツが「法的安定性を崩壊させたこと」は、「大多数の自覚を欠いた大卒知識人」をも含めて人民に理解されていない。このことは「道徳崩壊の状態」にほかならず、驚くべきである、という⁽³⁸⁾。モルトケが憤りを込めて1941年10月21日妻フレアに宛てた書簡は、より具体的に語っている。それはドイツ領土から東部占領地ゲットーへのユダヤ人移送抑留命令（10月14日）の実施について伝えている。

「ぞっとするような命令を新たに与えられても、誰ひとり何も感じなくなっているようです。どうして犯罪の共犯者になってしまうのか。（中略）土曜日からベルリンのユダヤ人たちが（シナゴークに一筆者）追いたて集められています。彼らは手に持てるだけのものを持って、リツマンシュタットやスモレンスクに送られるのです。彼らが空腹と寒さのなかで野垂れ死にするのを、私たちの目に触れさせないためなのです。（中略）皆がそれを知っているが、どうしてのんびり散策したりできるのだろうか。いったいどこにそんな権利があるというのか」⁽³⁹⁾。反ナチス活動の10年間を総括するボンヘッファーが、「悪」に与する人間の「愚かさ」に言及しながら、それを人間に生得的な問題としてではなく、「一定の歴史的状况のもたらす特別の現象」と捉え、宗教家として人間自身の「内面的解放」に最終的解決を求めるのは⁽⁴⁰⁾、このような状況を根源的に見据えていたからである。

またナチス・プロバガンダに幻惑され、その犯罪行為に無感覚であることをナチスと同罪とする『白バラ通信』の訴えは、シヨル兄妹やヴィリー・グラフらと行動を共にしたクルト・フーバー教授（1893-1943刑死）が認めるように、「学生たちの覚醒」をめざしたものであった⁽⁴¹⁾。さらに《ローテ・カペレ》が抵抗活動の手段としたナチス弾劾のピラが、ドイツ人民に向けて、その「奴隷化」の状態が結局は自己自身の責任であることを指摘するの⁽⁴²⁾、同様の意図から生じている。

したがってこの《覚醒》に、市民的抵抗者たちが追求してやまない運動の目標と課題がある。クライザウ・グループの目標と課題を記した『討議文書』（1942年6月頃起草）が、喫緊の課題として「全体のために責任をとることのできるドイツ人の内面的状態と態度」を挙げて「ドイツ人の人間としての存在を発展的な方向に揺さぶること」の必要性を強調し⁽⁴³⁾、またこの文書の作成に深く関わったイエズス会修道士兼神学者デルブ、A.（1907-1945刑死）自身はその『獄中文書』（1944年9月-1945年2月）で、「最低限精神的に覚醒しており、人格的に生き生きし、事柄を弁えた生活を生きることのできる人間」たることを訴えたのも⁽⁴⁴⁾、このためである。付言すれば、1933年4月24日、職業官吏再建法の施行によって社会民主党員のかどでハレ教育アカデミーの教授職（歴史・公民科担当）を罷免されたライヒヴァインが、亡命の途を自ら断って7年間、教師一人学童30名前後のティーフェンゼー村の学校をナチス・ドイツにおいて例のない「教育の孤島」たらしめ、子どもたちに《安易な適応力》に代わる《内面的な自己形成力（Selbstkraft）》の育成—主体的自己の形成—を図ったのも、基本的にはこうした目標と課題に連なる《教育的抵抗》の行動なのである⁽⁴⁵⁾。

iii) 宗教倫理

このようなドイツ人民の《覚醒》という目標は、すぐれて宗教倫理的に基礎づけられている。これには前提として、最初に述べた抵抗者たちの宗教的心性、つまりゲルデラー、ヨルクをはじめとして彼らの多くが、プロテスタントであれカトリックであれ、新旧世代の相違を越えて受洗後も、幼時から日常的に食前の祈りや教会礼拝など、宗教的な慣習と雰囲気の家環境のなかで人格を形成した事実がある⁽⁴⁶⁾。だが重要なのは、そのように内面に培われた宗教への親和的態度から、彼らがさらにすすんで確信的にナチス教義を批判しそれに対決する手がかりを、「キリスト教にもとづく倫理の物差し」(ヴィリー・グラフ)に見いだしていることである⁽⁴⁷⁾。

とくにクライザウのメンバーのばあい、宗教倫理に着目する姿勢は第一次世界大戦後の多様な思想運動、とくにキリスト教的思想運動への積極的な取り組みという彼らの行動の軌跡に、すでに窺うことができる。青年ライヒヴァインが社会主義思想に接近しつつ、なおかつそれとキリスト教との架橋に自己の思想的基盤を追求して、《宗教的社会主義》に傾倒したのも、その一例である⁽⁴⁸⁾。またシュテルツァーはキリスト者として1920年代、30年代をつうじて福音派のエキュメニズム(=教会再一致運動)にも積極的に与した人物であるが、《覚醒》にかんする彼の宗教倫理的な立論は明瞭である。彼によれば、《大衆人》は「社会学的問題」としてよりも「精神的問題」として捉えられ、彼らを「再び人間にする」ために、「コレクティヴィズム」のなかに霧消することを拒否し自己自身をとりもどす心の支え」として、キリスト教とその倫理が位置づけられる。そうすることで「人はひとりの人間であることをもう一度学び直さねばならない」と⁽⁴⁹⁾。この表現に、いわば《ドイツの民族精神》に対抗して《キリスト教ヒューマニズム》—テルプのいう「神律的ヒューマニズム(Theonomer Humanismus)」—の思想伝統が貫徹していることは明らかであろう⁽⁵⁰⁾。

だがこの宗教倫理は、市民的な抵抗者たちにとってもはや個人の内なる敬虔性の域にとどめおかれず、積極的に国家、社会にたいして意義づけられている。なぜなら彼らの対決する「国民社会主義」とは、シュテルツァーの表現によれば、「歴史と精神的伝統をつうじてさし示されたドイツとヨーロッパの進路を放棄し、(中略)他民族と共に生きることを不可能にしている」からである⁽⁵¹⁾。ゲルデラーが「いかなる民族も単独でこの世に生きているのではなく、神は他の民族をもつくり発展させたのであり、(中略)たえず彼らを抑圧することは明らかに神の掟に反する」⁽⁵²⁾と強調するのも、同様の趣旨からである。この見地からすれば、ボンヘッファーと堅信

礼を共に受けエキュメニズムに関わったクライザウ・メンバーの一人、外交官ヘフテン、H.B.(1905-1944刑死)が主張するように、「ヨーロッパ文化の基底」をなし、隣人愛の戒めを中核に人倫の基本体系を象るキリスト教を、その宗派間対立抗争の歴史を乗り越え、人種的優越妄想と人間蔑視のナチス教義にたいする対抗軸に賦活させることは、たとい世俗化した現実世界にあってもけっして「時代錯誤」ではない。むしろ今日の、ナチズムによる破壊と野蛮の状態を克服する方途となりうるはずであった⁽⁵³⁾。

モルトケが前述の覚書において「我々がめざすものは、個々人にこの世的なものを離れた諸価値への精神的な結びつきの感情を再び覚醒させることにあり、そのみが再び個々人に自由を与えるものとなり、それによって個々人は責任の感情を再び獲得する」と記すのも、キリスト教的倫理にもとづく人間回復が「国家主義や人種感情の克服」につながるとする考えに拠っている⁽⁵⁴⁾。ちなみに『白バラ通信』が人びとに「キリスト教的西欧文化の一員たる責任」を問い(1942年6月の第一のピラ)、「新しい精神のヨーロッパの建設」を訴えるのも(1943年2月の最終第六のピラ)⁽⁵⁵⁾、このような賦活された宗教倫理への強固な確信があったからである。

彼ら市民的な抵抗者たちが到達したこの新たな認識の様相は、シュテルツァーによって「キリスト教的現実認識」と表現されているが⁽⁵⁶⁾、そのさいに戦時下の極限的状況と、そこでの教会の与えた影響は決定的である。すなわち、両宗派教会はナチスによってその祭祀活動を厳しく抑圧されながらも、戦争の激化にともなう家族の離反や死別などの苦難が常態化しその重圧感が増す中で、《精神の避難所》としての役割と影響力をとみに高めていた。苦悩し過酷な試練に晒された人びとは、何よりも再び教会の福音と牧会の活動に慰めと安らぎを見いだしたからである⁽⁵⁷⁾。じつと秘密警察・諜報部の教会監視の『報告』(1943年4月22日)が目する、開戦以降全国的に教会離脱者が著しく減少し反対に教会への復帰者が増大したという事態は⁽⁵⁸⁾、教会だけが人びとの内面の欲求に応えたことを物語っている⁽⁵⁹⁾。またモルトケ自身1943年3月25日、戦争協力の説教を拒否し安楽死殺人や人種的迫害に抗議するベルリン司教プライズィング、K.の説教を引証し、新旧両宗派教会が対ナチズムの唯一の砦として、「(教会信仰からの離反を図る一筆者)猛烈な大衆操作と弾圧」に耐えて「重要な活動」をしている、と伝えている⁽⁶⁰⁾。ちなみに、帝国教会の存在を措いて、均制化に抗し在野勢力でありつづけた教会が、終戦にともなう統治機構の全面的崩壊の中で改めて指導的地位を確保しえたのも、《ナチス世界観の説教者》となった学校教員層と対照的な、ナチズムへの対応姿勢にあった。

してみれば、市民的な抵抗者たちがこうした状況をまのあたりにし、さらには、たとえばゲルデラーが二人の息子を、ヨルクも弟を共に東部戦線で失うなど、彼ら自身も苦難に身を置くことで、教会活動への理解とキリスト者たる自覚を深めていったとしても、そのことは容易に納得できるように思う⁽⁶¹⁾。モルトケは自らの信仰をめぐる意識の変化について、ストックホルムから1942年4月18日、イギリスの旧友カーティス、L. に書き送っている。「戦争前の話し合いで、私が神の信仰を（中略）本質的であると考えていなかったことは、あなたもご記憶でしょう。しかし今ではそれが誤り、まったくの誤りだと自覚しています」⁽⁶²⁾。

ワイマル改革期において積極的に《世俗化》政策に与した人びとにしても、その例外ではない。ライヒヴァインを介してクライザウに加わる労働組合指導者・元社会民主党国会議員ミーレンドルフ、C. (1897-1943) は1933年から1938年まで強制収容所の生活を強いられたが、彼のばあい、意識的に信仰に向かう回心の姿勢が見てとれる。1943年12月3日夜のライプツィヒ空襲で死亡する直前、彼は記している。「私はながらく宗教なしに生きてきました。しかしキリスト教だけが生に意味と拠り所を与えることができると、確信するようになりました」⁽⁶³⁾。またモルトケの妻フライア・モルトケによれば、ミーレンドルフの親友でクライザウ・メンバーとなるワイマル期のドイツ国旗党指導者ハウバッハ、Th. (1897-1945刑死) も、反教會的立場を離れて福音派の教会員となり、同じくクライザウ・メンバーの福音派神学者ゲルステンマイヤー、E. (1906-1986, 44年逮捕) から聖餐を受けたという⁽⁶⁴⁾。さらにナチス政権樹立後アメリカ亡命を余儀なくされた元首相ブリューニク、H. は、モルトケをその青年時代から見守ってきた人物であったが、彼はモルトケとクライザウの一員・外交官トロット・ツー・ゾルツ (1909-1944刑死) からの便りとして、社会主義者たちにも「宗教的基盤なくしては社会主義じたいが挫折する運命にある」と認識されるようになった、と記している⁽⁶⁵⁾。そこには宗教者、社会主義者が共に弾圧迫害されるというナチス支配固有の状況のもとで醸成された、両者の宥和的關係が見てとれる。

こうした事態をふまえて、はじめて市民的抵抗者たちがキリスト教的宗教倫理に自らの行動の規範を求めるだけでなく、それを積極的にナチズムにたいする対抗軸に設定するにいたった理由も理解できるであろう。

Ⅲ 「人間像の復元」— むすびにかえて

以上見てきたように、市民的な抵抗者たちの思想傾向

と反ナチスの課題意識には、同時代のドイツ人亡命者新フロイト学派フロム、E. のいう「ナチズムの人間の基盤」⁽⁶⁶⁾への注目、すなわちナチズムにからめ捕られ加担しあるいは傍観するドイツ人民＝《大衆人》的存在を、宗教倫理的な見地から克服せんとする《覚醒》への意図がつよく脈打っている。

注目すべきことに、この《覚醒》の意図はとくにクライザウのばあい、より明瞭に《人間形成》の問題領域へと敷衍されている。《クライザウ計画》として知られるグループのナチス瓦解後にそなえた戦後構想は、新国家体制、新経済秩序、外交政策、戦争犯罪の処罰など多岐にわたるが、中心テーマに新体制のなかでの宗教・教会・教育・学校の問題を据えるのも、このためである。先のカーティスに宛てたモルトケ書簡は、そうした立場を端的に表している。彼はいう。「私たちにとって、戦後のヨーロッパは領土や軍隊とか複雑な体制組織あるいは大規模な構想といったことが問題なのではありません。要は、いかにして我々の同胞の心の中に人間像 (picture of man) を復元できるかということです。それは宗教、教育の問題、労働と家庭の接合の問題、また責任と権利の正しい関係の問題なのです」⁽⁶⁷⁾。

この文言には、ナチス支配の野蛮化にともなう人心の荒廃とアノミー状態におかれた戦後ドイツの崩壊社会を見据えて、戦後理念を「人間像」の「復元」という新たな《人間形成》の問題に焦点づけて構想する基本姿勢が、はっきり読みとれる。前述の『討議文書』が劈頭「内部的には崩壊し、危殆に瀕した国民・国家を再建し救済すること。ドイツ人とその精神の基本的な力を救済すること」を挙げ、「教育目標」として「脱大衆化—自分自身たることを自覚した人格の形成」を強調するのも⁽⁶⁸⁾、同一の文脈からである。そこに戦後ドイツにおいて優先的に着手されるべき対象もあったのである。

また、こうした姿勢こそがクライザウを、往々にしてそれと対比されるグループ、すなわち人間の尊厳と法の支配、キリスト教理念の復権という共通軸を持ちながらも、「強力な軍隊」の保有や「植民地」領土の保全など、復古的な「政治的リアリズム」に傾斜するゲルデラー・グループ⁽⁶⁹⁾から分かつだけでなく、抵抗運動においてもクライザウを《思想集団》として独自の存在たらしめることにもなった。

市民的抵抗グループが共有したドイツ人民の《覚醒》の運動目標は、クライザウ・グループの戦後構想においてその具体的展開を示すことになるのである。

筆者が反ナチスの政治的抵抗運動にたいし教育研究として接近しようとするのも、体制転覆という政治行動ではなく、如上の《覚醒》から《人間形成》にいたる抵

抗者の思考過程に注目するからである。はじめに記したように、本稿はあくまでその素描の域にとどまっており、クライザウにかなする詳細な検討じたいは別稿に委ねるほかない。

注

- (1) 拙稿「ナチズム・抵抗運動・戦後教育」(教育史学会編『日本の教育史学』第45集, 2002年10月, 295-304頁)。
- (2) Jutta-B. Lange-Quassowski: *Neuordnung oder Restauration?* Opladen 1979. 戦後50年代に始まるこの論議の概要については, Ch. Führ / C.-L.Furck (hrsg.): *Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte*, Bd.VI, 1945 bis zur Gegenwart, Erster Teilband Bundesrepublik Deutschland, München 1998, S.10 ff.
- (3) W.Conze / M.R.Lepsius (hrsg.): *Sozialgeschichte der Bundesrepublik Deutschland. Beiträge zum Kontinuitätsproblem*, Stuttgart 1985. とくに M. Broszat (hrsg.): *Zäsuren nach 1945. Essays zur Periodisierung der deutschen Nachkriegsgeschichte*, München 1990.
- (4) 拙稿「反ナチ抵抗運動と教育史研究の課題」(『秋田大学教育文化学部研究紀要』第56集, 2001年3月 所収)。
- (5) 1985年7月21日の「クライザウ・グループ展」(於: ベルリン国立図書館) 開幕式の挨拶 (*Jahrbuch Preußischer Kulturbesitz*, Bd.22 (1985), Berlin 1986, S.112-113)。W.E.Winterhager: Politischer Weitblick und moralische Konsequenz—Der Kreisauer Kreis in seiner Bedeutung für die deutsche Zeitgeschichte. in, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 38.Jahrgang 1987 Mainz, S.402.
- (6) 拙稿「クライザウ・グループとキリスト教教育の復権—クライザウ教育計画—」(『叢書比較教育社会史』第2巻 所収, 昭和堂 近刊)。
- (7) D.Bonhoeffer: *Widerstand und Ergebung*. (Hrsg.v. E.Bethge) 15. durchges. Aufl. Gütersloh 1994, S.12-13.
- (8) U.Schulz (hrsg.): *Adolf Reichwein. Ein Lebensbild aus Briefen und Dokumenten*, München 1974, S.249.
- (9) B.R.von Oppen (Hrsg.): *Helmut James von Moltke. Briefe an Freya 1939-1945*, München 1988, S.611ff. その他のクライザウ・メンバーの「別れの書簡」については, W.E.Winterhager (bearbeitet): *Der Kreisauer Kreis. Porträt einer Widerstandsgruppe*, Berlin 1985, Textanhang, S.236-237.
- (10) P.Steinbach / J.Tuchel (hrsg.): *Widerstand in Deutschland 1933-1945*, S.251 (田村他訳『ドイツにおけるナチスへの抵抗1933-1945』現代書館 1998年 258-259頁)。
- (11) Hannah Arendt: *Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil*, Revised and Enlarged Edition, New York 1965, p.100 および大久保和郎訳『イエルサレムのア

イヒマン—悪の陳腐さについての報告』みすず書房1969年, 訳者解説, 232頁。

(12) H.Rothfels: *Die deutsche Opposition gegen Hitler — eine Würdigung*, revidierte Ausg. Frankfurt / M. 1959. (Neuausgabe, Zürich 1994) Einleitung, S.34.

(13) K.D.Bracher: *Die deutsche Diktatur—Entstehung•Struktur • Folgen des Nationalsozialismus*, Frankfurt / M. 1979 (6.Aufl.), S.423. K.v.Klemperer: *Glaube, Religion, Kirche und der deutsche Widerstand gegen den Nationalsozialismus*. in, H.Graml (hrsg.): *Widerstand im Dritten Reich — Probleme, Ereignisse, Gestalten*, Frankfurt / M. 1984, S.140-156. G.Ringshausen: *Evangelische Kirche und Widerstand*. in, H.Engel (hrsg.): *Deutscher Widerstand — Demokratie heute*, Bonn 1992, S.62-117.

(14) G.May: *Kirchenkampf oder Katholikenverfolgung. Ein Beitrag zu dem gegenseitigen Verhältnis von Nationalsozialismus und christlichen Bekenntnissen*, Stein am Rhein 1991, S.441ff.

(15) 拙稿「クライザウ・グループとキリスト教教育の復権—クライザウ教育計画—」参照。

(16) U.Amlung: *Adolf Reichwein 1989-1944. Ein Lebensbild des politischen Pädagogen, Volkskundlers und Widerstandskämpfers*, Frankfurt / M. 1991, S.457. (対馬・佐藤訳『反ナチ抵抗の教育者—ライヒヴァイン1898-1944—』1996年昭和堂 377頁)。

(17) W.E.Winterhager (bearbeitet): *Der Kreisauer Kreis. Porträt einer Widerstandsgruppe*, S.140, W.Benz: *Widerstand traditioneller Eliten*. in, *Deutscher Widerstand 1933-1945. Informationen zur politischen Bildung*, 1994, S.33.

(18) G.Ringshausen: *Evangelische Kirche und Widerstand*. in, H.Engel (hrsg.): *a. a. O.*, S.85.

(19) U.Schulz (hrsg.): *a. a. O.*, S.116.

(20) Ger van Roon: *a. a. O.*, S.66-67.

(21) F.Krause: *Goerdelers politisches Testament. Dokumente des anderen Deutschland*, New York 1945, S.40.

(22) S.Neumann: *Permanent Revolution. The Total State in a World at War*, New York 1942, p.186 (岩永・岡・高木訳『大衆国家と独裁—恒久の革命』1960年みすず書房 178頁)。

(23) F.Krause (Hrsg.): *a. a. O.*, S.41.

(24) P.Steinbach / J.Tuchel (hrsg.): *a. a. O.*, S.279ff. J.Tuchel: *Maria Terwiel und Hermut Himpel—Christen in der Roten Kapelle*. in, H.Coppi / J.Danyel / J.Tuchel (hrsg.): *Die Rote Kapelle im Widerstand gegen den Nationalsozialismus*, 1994 Berlin, S.213ff.

(25) W.Ritter von Schramm (hrsg.): *Beck und Goerdeler. Gemeinschaftsdokumente für den Frieden 1941-1944*, München 1965, S.86-87.

- (26) Ger van Roon: *Neuordnung im Widerstand. Der Kreisauer Kreis innerhalb der deutschen Widerstandsbewegung*, München 1967, Dokumentenanhang, S.507 ff.
- (27) Th. Steltzer: *Von deutscher Politik. Dokumente, Aufsätze und Vorträge*. Frankfurt / M. 1949, S.60-62. この論点にかんする詳細な分析としてとくに H.Mommsen: *Gesellschaftsbild und Verfassungspläne des deutschen Widerstandes*. in, W.Schnitthener / H. Buchheim(hrsg.): *Der Deutsche Widerstand gegen Hitler*, Köln 1966, S.22ff.
- (28) José Ortega y Gasset: *Der Aufstand der Massen*, Rowohlt, 1930. (Rowohlt's deutsche Enzyklopädie. Das Wissen des 20. Jahrhunderts im Taschenbuch mit enzyklopädischem Stichwort, Nr.10)
- (29) S. Neumann: *a. a. O.*, p.96.
- (30) H. Mommsen: Die Opposition gegen Hitler und die deutsche Gesellschaft 1933-1945. in, K.J.Müller (Hrsg.): *Der deutsche Widerstand 1933-1945*, Paderborn 1990, S.24.
- (31) Th. Steltzer: *a. a. O.*, S. 8.
- (32) U.Amlung: *a. a. O.*, S.128.
- (33) Adolf Reichwein: *Ein Lebensbild aus Briefen und Dokumenten*, München 1974, S.233.
- (34) M.Balfour / J.Frisby: *Helmuth von Moltke. A leader against Hitler*, London 1972, p.184.
- (35) W.Ritter von Schramm(hrsg.): *Beck und Goerdeler*, S.88.
- (36) M.Balfour / J.Frisby: *ibid.*, p.184.
- (37) P.Steinbach / J.Tuchel(hrsg.): *a. a. O.*, S.201.
- (38) F.Krause: *a. a. O.*, S.19, S.24, S.37f.
- (39) B.R.von Oppen(hrsg.): *Helmuth James von Moltke. Briefe an Freya 1939-1945*, München 1988, S.307-308, M.Balfour / J.Frisby: *ibid.*, p.171-172.
- (40) D.Bonhoeffer: *a. a. O.*, S.15-16. さらに宮田光雄『ボンヘッファーを読むー反ナチ抵抗者の生涯と思想ー』(岩波書店1995年) 52-62頁の叙述参照。
- (41) P.Steinbach / J.Tuchel(hrsg.): *a. a. O.*, S.256.
- (42) *ibid.*, S.269.
- (43) R.Bleistein(hrsg.): *Dossier. Kreisauer Kreis*, Frankfurt / M. 1987, S.66-67.
- (44) R.Bleistein(hrsg.): *Alfred Delp, Gesammelte Schriften*, Bd.IV, 2.Aufl. Frankfurt / M. 1985, S.314. 尤もモルトケのばあい、グーツヘルとして代々福音派教会のパトロンに地位にあったが、母ローズ・イネスはクリスチャン・サイエンスの信者であった。だが彼を含め子どもたちはその教えからは自由に育てられたという (Ger van Roon: *Neuordnung im Widerstand*, S.58)。
- (45) 拙稿「ナチス体制下の教育的抵抗ーライヒヴァインとティーフェンゼー農村学校ー」(『思想』No.833, 1993年11月, 164頁)。
- (46) 市民的抵抗者たちの宗教的性向については, G.Ringhausen: *Evangelische Kirche und Widerstand*. in, H.Engel(Hrsg.): *a. a. O.*, S.81ff.
- (47) P.Steinbach / J.Tuchel: *a. a. O.*, S.249.
- (48) 彼は1922年9月15日, 父に宛てた書簡で伝えている。「私には知識が宗教に代替できるものとは信じられません。むしろ宗教は人間の体験しうるものの最も根源的で完全な形態であるように思えます。(ですから私は自分を宗教社会主義者のグループに加えるのがいちばんふさわしいのかもしれない)。(U.Schulz-Hrsg.: *a. a. O.*, S.46.)
- (49) Th.Steltzer: *a. a. O.*, S.64. 同様の論旨をクライザウのメンバー《ゲレス学術振興会》会長ペーターズ, H. (1896-1966) も展開している (H.Peters: *Zwischen Gestern und Morgen. Betrachtungen zur heutigen Kulturlage*, Berlin 1946, S.102ff.)
- (50) デルブは人道の理念の宗教的基礎について強調し, 「真のヒューマニズムは神律的ヒューマニズムである」という (R.Bleistein-Hrsg.: *Alfred Delp, Gesammelte Schriften*, Bd.IV, S.309-311)。同じくペーターズはこれを「最近までキリスト者の組織たる教会を最重要の担い手としたヨーロッパ文化」の「根幹」と位置づける (H.Peters: *a. a. O.*, S.111f.)。
- (51) Th.Steltzer: *a. a. O.*, S.82. Ders: *Sechzig Jahre Zeitgenosse*, München 1966, Anlage (Denkschrift vom 25.Juli 1944 von Theodor Steltzer für Lionel Curtis), S.285-286.
- (52) W.Ritter von Schramm(hrsg.): *Beck und Goerdeler*, S.83-84.
- (53) とくに彼の「1941年4月4日のクリム宛の書簡」(H.van Roon: *Neuordnung im Widerstand*, S.156)。この点にかんしては, K.v.Klemperer: *Glaube, Religion, Kirche und der deutsche Widerstand gegen den Nationalsozialismus*. in, H.Graml(Hrsg.): *a. a. O.*, S.149.
- (54) Ger van Roon: *Neuordnung im Widerstand*, S.509.
- (55) Inge Scholl: *Die Weiße Rose*, Erw. Neuausg. Frankfurt / M. 1982, S. 96-121.
- (56) 「ライオネル・カーティスに宛てた1944年7月15日付け覚書」(Th. Steltzer: *Sechzig Jahre Zeitgenosse*, Anlage, S.285-286)。
- (57) K.Vondung: *Magie und Manipulation—Ideologischer Kult und politische Religion des Nationalsozialismus*, Göttingen 1976, S.108. (池田昭訳『ナチズムと祝祭』未来社1988年, 121-122頁)。河島幸夫『戦争・ナチズム・教会』新教出版社1993年, 193頁。
- (58) 河島幸夫, 前掲書, 234-239頁。H.Boberach (von bearbeitet): *Berichte des SD und der Gestapo über Kirchen und Kirchenvolk in Deutschland 1934-1944*, Mainz 1971, S.812.

(59) このことは日常生活の襲にしみ込んだ信仰領域への国家介入に基本的な限界があったことを表している。ブラッハーが、ナチス指導部が教会の「現実的あるいは潜在的な抵抗」を強力とみなし、その排除を戦後の最重要の課題としていたと指摘するのも、このためである (K.D.Bracher: *a. a. O.*, S.423)。

(60) M.Balfour / J.Frisby: *ibid.*, S.220-221.

(61) G.Ringhausen: *a. a. O.*, S.83f. K.v.Klemperer: *a. a. O.*, S.146, Ger van Roon: *a. a. O.*, S.85.

(62) M.Balfour / J.Frisby: *op. cit.*, p.185.

(63) Th.Stelzer: *Von deutscher Politik*, S.75.

(64) K.von Klemperer: *a. a. O.*, S.142.

(65) Claire Nix(hrsg.): *Heinrich Brüning. Briefe 1946-1960*, Stuttgart 1974, S.87.

(66) Erich Fromm: *Escape from Freedom*, New York 1941 (日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社 1965年 240頁)。

(67) M.Balfour / J.Frisby: *op. cit.*, p.185.

(68) R.Bleistein(hrsg.): *Dossier. Kreisauer Kreis*, S.65-66.

(68) とくにゲルデラーとベック将軍たちとの共同作品とされる政権構想案一覽書『目標』(W.R.v.Schramm(Hrsg.): *a. a. O.*, S.88, S.97, S.100f.) 参照。また M.Balfour / J.Frisby: *ibid.*, p.207-209.